

小学校間の連携を起点に 中学校区全体で学力を伸ばす

埼玉県 加須市大利根中学校区

幼・保・小・中の連携を推進する埼玉県加須市。地域の小学校校長間の交流が盛んだった大利根中学校区では、4つの小学校の強い結びつきを土台に小中連携を展開している。小・中の教員が一堂に会する研修会や、使用するドリルとその学習スタイルの共通化などを通して、小学校での学びを中学校につなげている。

◎加須市は、埼玉県北東部に位置し、群馬県・栃木県・茨城県に接する。同市の東部にある大利根中学校区は、4つの小学校、1つの中学校から成り、幼保小中連携で子どもの学力向上に取り組む。

大利根東小学校 児童数 219人、学級数 8学級（うち特別支援学級 1）
 原道小学校 児童数 153人、学級数 7学級（うち特別支援学級 1）
 豊野小学校 児童数 110人、学級数 7学級（うち特別支援学級 1）
 元和小学校 児童数 172人、学級数 7学級（うち特別支援学級 1）
 大利根中学校 生徒数 289人、学級数 10学級（うち特別支援学級 1）

電話 加須市教育委員会学校教育課 0480-62-1111（代表）
 URL https://www.city.kazo.lg.jp/soshiki/kyoiku_iinnkai/



加須市立大利根東小学校
校長

東郷里子

とうごう・さとこ

同校に赴任して2年目。



加須市立大利根中学校
校長

駒宮正行

こまみや・まさゆき

同校に赴任して2年目。

小中連携の推進

定期開催する合同会議で 小・中のキーマンが話し合う

東京都心から約50km、埼玉県北東部に位置する加須市では、中学校区を基本単位とした小中一貫教育の充実を図っている。2019年度に本格的に始まった幼・保・小・中の合同会議「リンクミーティング」は、中学校区ごとに年3回程度開催。①学びの深まり、②心の育成、③教職員の指導力、④家庭・地域・学校の連携を主なテーマとし、議題に応じてPTA会長や学校評議員も加わって、家庭・地域・学校をつないでいる。

このリンクミーティングを、既存の会議と効果的に連携させたのが、市内東部にある大利根中学校区だ。

中学校1校と小学校4校から成る同校区は、三世帯世帯が多くPTA活動なども盛んで、学校がコミュニティの中心的役割を担っている。そのため、小学校4校の校長が集まり、地

域行事への参加や学校共通の取り組みなどについて話し合う機会を日常的に設けてきた。

校区内の共通課題の1つである学力向上においても、各校の取り組みと成果、課題などを共有する「4校合同学力向上会議」を発足させた。大利根東小学校の東郷里子校長の発案によるもので、小学校4校の教頭と教務主任が参加する。そうした小学校間の連携の蓄積を、市が進めるリンクミーティングの一部として位置づけることで、小・中9年間を貫く視点でより効果的な実践を進めようとしている。

指導力向上の取り組み

学校種を超えて研修を実施し、 課題や指導の工夫を共有

学力向上に関する具体的な実践を見てみよう。まず取り組んだのは、教員の指導力向上だ。校区内の各小学校が行う研究発表会には、校区の小・中学校の全教員が参加し、各校

の課題を地域の課題として受け止めて、その対応策を共有するようになった。さらに、大利根東小学校で行われたプログラミング教育の研修会や、豊野小学校が実施した道徳の授業研究会にも、全小・中学校の教員が参加。それらの資料は、教員がいつでも見られるよう、小学校4校共有の専用ネットワーク上に公開している。

また、学力を定量的に評価して指導改善に役立てるため、小学校4校共通で小学4～6年生を対象とした国語・算数の学力調査を、2019年度から実施することにした。

「4校はいずれも小規模校のため、自校のみの調査や分析では、その正当性の評価や改善策の検討が十分ではありませんでした。そこで、10月に4校共通の学力調査を実施し、合同分析会を開きました。そこで把握した課題に基づいて、進級までに学

図 ドリルの使い方の説明プリントと、取り組み状況のチェック表

けいさん 計算ドリルの使い方

①1回目に取組んで、間違えた問題は問題番号の横に**えんぴつ**でチェックをする。
 ②2回目に取組んで、間違えた問題は問題番号の横に**青色**でチェックをする。
 ③3回目に取組んで、間違えた問題は問題番号の横に**茶色**でチェックをする。

【1回目の②の問題を間違えた場合】

① 36+5
 ② 27+9
 ③ 39+6

④1回目に正解した問題は、2回目にはやらない。問題は3回目にはやらない。
 ※正解した問題はやらなくてもいいが、学年の学習に取り組むようにする。
 ⑤計算ドリルの問題が解けるようになったら、自分で進める。
 ※いろいろな問題に取り組めるようになる。
 ⑥課題シートでアスミできるようになったか確認

大利根中学校区内の4小学校では、同じ計算ドリル・漢字ドリルを採用し、使い方も統一。使い方を示したプリント(左)を全児童に配布した。取り組みの進行状況を記入するチェック表(右)も作成し、子どもが主体的に取り組めるようにしている。
 *大利根東小学校提供資料をそのまま掲載。

学力向上 チェックシート 名前()

教科：国語(低学年)

No	単元名	レベル	1回目	2回目	No	単元名	レベル	1回目	2回目
1	かたかな	★	/	/	16	しりとり	★	/	/
2	かたかな(ひらがな)	★	/	/	17	しりとり	★★	/	/
3	かたかな(のびすず)	★	/	/	18	しりとり	★★★	/	/
4	かたかなで書くことば①	★★	/	/	19	まちがい探し①	★	/	/
5	かたかなで書くことば②	★★	/	/	20	まちがい探し②	★	/	/
6	かたかなで書くことば③	★★	/	/	21	まちがい探し③	★★	/	/

習の積み残しがなく、3学期の指導計画を立てました」(東郷校長)

リンクミーティングでは、学力調査の結果分析に基づいて立てた各校の指導方針を共有。また、小学6年生の調査結果は、保護者の了承を得た上で大利根中学校とも共有し、新入生の実態把握に役立てる。大利根中学校の駒宮正行校長は、取り組みの意義を次のように語る。

「新入生の学力状況を入学前に把握できることは、いわゆる中1ギャップの防止に非常に有効です。4校の結果を本校の各教科会で確認し、次年度の指導計画の立案や、教員間の共通理解のために活用しています」

● 学力向上の取り組み

小学校卒業時に出す課題で学習習慣と意欲を維持・向上

新たな試みとして、小学校4校が小学6年生の春季休業中に課題を出し、進学先の中学校に提出する取り組みを始めた。

「小学校卒業後の春季休業中には課題を出さないのが一般的ですが、たとえ短時間でも机に向かう習慣を途

切れさせないことで、中学校の学習をスムーズに進められるのではないかと考えました。中学校進学に向けて学習意欲を高め、主体的に学びに向かう態度を育む機会にしたいという期待もありました」(東郷校長)

課題の内容は各校の実態に応じたものとし、教員向けの研修資料と同様に共通のネットワーク上で閲覧できるようにしている。2020年度からは、中学校が新入生の状況を把握しやすいよう、課題の内容を4校共通にすることを検討中だ。

「課題を受け取る新1年生の担任には、解答の正誤にこだわらず、子どもの意欲を褒めることを重視してほしいと伝えました。『丁寧に書けているね』『最後までできたね』と担任が声をかけることで、入学したばかりの生徒は安心し、中学校での生活が安定したものになります。また、担任は、課題への取り組み方を見ることで、生徒理解も深められるでしょう。小学校4校からの提案を受けて始めましたが、本校での成果につなげていきたいと考えています」(駒宮校長)

2019年度には、漢字と計算のドリルとその使い方を、小学校4校の

全学年で統一させた。さらに、中学校にも同じ内容を提案して、ドリル学習において9年間で共通のスタイルを構築しようとしている。

「全学年で同じ形式のドリルにし、使い方も統一することで、進級後も同じ方法で学習を進められるようにしています。4校全体で学力を高め、どの小学校から進学しても中学校で同じようにスタートを切れることを目指しています」(東郷校長)

実施に際しては、リンクミーティングの学力向上部会で方針を決め、各校の教頭と教務主任が活用法を話し合った。具体的には、単元ごとに取り組み状況を記入するチェック表を用意し、間違えた問題のみを解き直すようにして、取り組んだ日付を記入させ、子どもが自身の到達度を把握できるようにした(図)。

● 成果と展望

教員の指導改善の意識が高まり、子どもの学力も向上

4つの小学校の連携を起点に中学校へと拡大させる連携を通じて、小・中それぞれの指導スタイルや文化の違いが、教員へのよい刺激となっている。その結果、教員の指導改善への意識の高まりが見られる。小学校の若手教員は、授業で明確にめあてを掲げ、それを到達目標とした授業内容を組み立てるようになった。また、あるベテラン教員は、学習効果が高そうだが取り組みをためらっていた協働学習への挑戦を計画中だという。

教員の指導力向上の取り組みは着実に実を結び、「埼玉県学力・学習状況調査」の結果からも学力向上につながっていることが分かっている。小学校間の連携した取り組みで力をつけた子どもたちが、中学校でさらに活躍できるよう、小中連携を一層強化していく方針だ。

VIEW21 教育委員会版 2019 vol.4 19